とある雙桂にとらはれて之を月の意に解し、それに次の「離箕」の二字を附けて區切つたことにある。しかしながら、この桂は開元寺本の誤りで、挂が正しく、百丈とは篋纜の意であつて、これは私の節解に明らかな通り「五兩單飛」と對をなす句であるから「百丈ならび挂く」とよまなければならない。從つて、「離箕創節」が一句になつて「廣漠初飈」と對をなす。離箕とは、尙書洪範に「月經于箕多風」と見え、春秋緯（周禮太宗伯疏引）に「月離于箕、風必揚沙」と見えることより見て、こゝは「廣漠初飈」を繰返して「風が吹きはじめた時」と言つてゐるものと解せられる（離はカカルと訓する）。「棄玄朔」を氣溫を述べたものと解するのは失當で、これは「向朱方」と對して、さきの「面翼軫背番禺」（この翼軫を天文を按じて精密に記したといふのも妥當でなく、單に「南をさして」と解すべきである）と同じことを繰返したものである。

結論として、この本はその根本となつたテキストがよくなかつたため――この缺陷は致命的である――と、讀解に間々妥當でない點があるために、『大唐西域求法高僧傳』の標準版とはなし難いものであると言はねばならない。譯註者の拂はれた勞力が多大であつたらうと思はれるだけに、一層遺憾である。足立氏がさきに著された『法顯傳』は詳しい校勘記がついてゐたから、とにかく利用し得た。今度のものは「高麗本」と「黃檗本」との異同の幾つかゞ記されてゐるにすぎない。『法顯傳』の場合ほどの煩勞を敢てせずとも、譯註を施すにあたつて、たゞ大正藏經本を底本に用ゐて――この方が圖書寮御藏書を底本とするより遙かに手輕であらう――その句讀の誤りを匡しただけで（なほ事情が許せば校勘の不備をも補へば）、それが學界に占むる位置は今度の本とは比べものにならなかつたであらうと惜しまれる。

〔藤枝晃〕

金帳汗國史　蒙古研究叢書第二

A・ヤクボフスキー　B・グレコフ著

播磨楢吉譯

昭和十七年三月廿日　生活社發行

A5判本文三九九頁　定價五圓八十錢

過去に於けるロシアの東洋學が、蒙古學研究の上に如何に偉大なる足跡を殘したかに就ては今更改めて說く迄もない。而も此の傳統は最近のバルトリド、ウラジミルツヲフよりポッペ、カザケヴヰチの現在に至る迄、依然として維持されてゐるのである。然るにも拘らず、其の言語の特殊性と書籍の稀覯とに阻まれて其の成果の利用が我が國に於て兎角等閑に附され易いのは、事情已むを得ぬとはいひながら甚だ遺憾の極みであつた。此の點、吾が播磨楢吉氏が善隣協會に在つて絕えず蒙古史研究に關するロシア資料を翻譯紹介せられてゐたことは、其の功績

洵に大なるものありといはねばならない。こゝに紹介せんとする「金帳汗國史」は、氏が嘗て數回に亙つて雜誌『蒙古』誌上に譯出掲載せられた所を一括し、蒙古研究叢書第二卷として世に問はれたものであつて、これが斯學の研究に貢獻することあるべきは疑はぬものである。尤も本書には一九三九年、即ち原書刊行の翌々年に、フランスに於けるスラブ研究會々員 François Thuret による翻譯 "La Horde d'Or, la domination tatare au 13e et 14e siècles de la mer Jaune à la mer Noire" が既に行はれてゐる。併し乍らこの事實は決して邦譯の價値を何ら下げるものではあり得ない。「ヤクボフスキー及びグレコフのこの著書には、尨大な關係資料の批判の結果、正確なりと認められる史實をのみ提供こそすれ一般に見受けられるが如き歴史小說に類するものは見當らない。」といへるツーレーの序文を以て之を知るべきであらう。著者A・ヤクボフスキー(一八八六—)、B・グレコフ(一八八二—)に就ては俱にレニングラード大學教授にして歴史研究院會員を兼ね、前者は「ベルケ・サライの手工業の起源」、「ウルゲンチの廢墟」等の研究に於て、後者は「キエフ侯國の封建制度」、「十四—十六世紀に亙るモスコー侯國の封建村落に就て」等の論說を以て夫々現代ロシア史學界に著名な史家である。本書に收むる所の前篇『金幹耳朶』は此のヤクボフスキーの作であり、後篇『金帳汗國とロシア』は即ちグレコフの著に係る。

前篇『金幹耳朶』には先づ序文に於て、南ロシアの大草原が十一世紀末以來既に回教徒史家の所謂デシト・イ・キプチヤク、即ちキプチヤク人の居住する草原となり居たる次第より說き起し、以下章を重ぬること七、蒙古人社會の高度な統制と絶えざる封建戰爭に分裂せる當時のロシアとの對照に於て、ノブゴロド侯國を除く大半の諸侯國、例へばガリシア・キエフ・チェルニゴフ・ヴァリニア・ペレソプニツ・リヤザン・ウラジミール・スズダル等が順次各個に擊破されてこゝに新たなる蒙古人政權金幹耳朶が成立したるを述べ、續いて金帳汗國の政治・外交の推移を總叙し、轉じて其の社會的・經濟的制度を究明し政治組織を論じ最後に都市生活を描いてそこに蒙古人支配階級の生態を執へると共に文化生活の一章を設けて一般遊牧蒙古人の生活をも漏らさない。之に對して後篇に於ては、先づ第一章を以て蒙古軍侵入直前のロシアに存在した諸侯國の反目對立狀態を、續く三章を費して其の征服の經過を、そして更に第五章の一章を割いて其の國內組織の記述に充てゝゐるのであるが、併し何といつても本篇の中心は金帳汗國とロシアとの政治關係を取扱へる第六章及びロシア史上に於ける蒙古政權の意義に關する諸家の意見と題する最後の一章に在りといはねばならない。十四世紀に於けるモスコー侯國の勃興を目して金帳汗國の壓制に對する

ロシア民族の鬪爭過程の所產とし、之が商業經濟の發達に伴ふ諸侯國間の經濟的緊縛を紐帶として、こゝに單一國家形成への方向が定位され、其の表現として蒙古政權の權威を否定するモスコー侯ドミトリー・ドンスコイに依るクリコヴオの戰捷が在つたと說明するあたり、流石にロシア古代史、特に其の經濟史の專門家としての卓越した見解が示されてゐる。

兩書共に引用する所は博くヨーロッパ・イスラム諸國の典籍はもとより、古代ロシアの諸年代記、更には近時に於ける考古學的諸研究の結果をも取り入れ頗る多彩である。就中古代ロシア文獻を縱橫に驅使し得た點は、ロシア人史家にして初めて爲しうる所であつて、前世紀以來ハンマーの「金帳汗國史」に向けられてゐたロシア學界の非難と不滿とを完全に除去したものといふべきであらう。抑〻又金帳汗國の出現は十三世紀に於けるロシア諸侯國分立の形勢に負ふ所少なからざるものであり、同時に又十四世紀末に於けるモスコー侯國の强大化を將來せしめたものでもあつた。此の點、それは確にロシア史の上に重大な意義を持つものに相違はない。が併しいふ迄もなく、金帳汗國は決して單にウラジミール侯國の爲に在つたのでもなければ又モスコー侯國の爲に在つたのでもない。金帳汗國には金帳汗國自體の存在意義が主張される筈である。あく迄もヂユチ・ウルス其のものの究明に目標を置くヤクボフスキーと、寧ろ其がロシア史に如何なる位置を占めるべきかを問題とするグレコフ、此の二つの立場よりする金帳汗國史を同時に提供する本書は確に其の內容の豐富を誇るに足るであらう。

尤も本書に於ても更に望みうべき點は絕無ではない。一讀後直ちに感じられる要望としては、何よりも先、史實の確定、其の內容の擴充が擧げられる。勿論問題解決に直接資すべき文獻の缺如は之を否み得ないとしても、併し著者も指摘せる如く「金帳汗國は法律的には單一なる成吉思汗帝國の各部分と見なされた」のである。諸汗國、殊に元朝の記錄は少くとも制度文物に關する限り、補ふ所は確に少しとはしない。達魯花赤（ダルガチ）＝バスカク然り、斡脫（ウルタク）然り、租稅買撲制度・戶口調査或は被征服地に於ける封建世侯の蒙古汗に對する義務等に於て又然りである。而も東方史料に對する此の無關心は、獨り瑣々たる史實の繫穿にのみ係るべき問題ではあり得ないのである。蒙古大汗國の一支としての考察の有無は、延いては金帳汗國其のものの正しい理解をも左右するであらうからである。

最後に、數多くのロシア古畫並に興味深いミニアチユールを挿畫として挿入し而も其の出所を明かにされるの煩を避けられなかつた譯者に對して、今一つ歷史地圖の附載を望みつゝ此の稿を了ることにする。

〔愛宕松男〕